Heart to Heart

「人への投資」のもと、地域に根差した組合活動を推進しよう

清水事務局長の ハート・トゥ・ハート vol.11

サッカー・ワールドカップ大会！

昨年末、W杯の本大会が開催され、ドイツとスペインを破ってグループステージを突破した日本代表「SAMURAI BLUE」の活躍に多くの人が心を揺さぶられたことと思います。私が中学3年の1974年正月の「高校サッカー」で、2年連続決勝に進んだ強豪の静岡の藤枝東高校を破って初出場で初優勝した大阪の北陽高校に心躍らされたこと、同年のW杯自国開催で2度目の優勝を遂げた、「皇帝」ベッケンバウアーと2021年に亡くなった「爆撃機」ゲルト・ミュラーが率いた西ドイツに感動したことを懐かしく思い出しました。

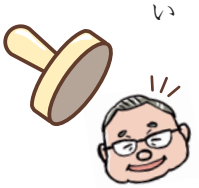
50年近く前のW杯を考えれば、日本の躍動は隔世の感を遥かに超えるものでしたが、26人の日本代表中19人が海外移籍選手という事実を見れば当然のことと思いを新たにしました。同時に30年余り前の1991年にJリーグを設立し、地域に根差したクラブ運営を行い、サポーターを獲得し、12歳以下のジュニアや18歳以下のユースを養成機関として位置付けるとともに、「社会貢献活動などを通じた人間教育、選手のキャリアデザイン支援、将来プロとなる選手の育成、それに伴う指導者や審判員の養成。さらにはクラブ経営を担う人材の育成など、多岐にわたる人材育成に取り組んでいる」ことが海外でも通じる日本サッカーの発展に繋がっているのだと思います。まさに「人への投資」と「地域に根差した活動」、「支援者の獲得」など、私たちが進める労働運動にも共通する重要な視点ではないかと考えます。

「レフェリーの魅力はサッカーの魅力を引き出せること」！

2011年3月の東日本大震災による壊滅的な被害と悲しみ、その後の連合も全国展開で取り組んだ復旧・復興ボランティアの中で、7月に日本女子代表「なでしこジャパン」がW杯で優勝した時は、その強く諦めないチームの闘う姿に大きく勇気づけられました。

カタールで行われた昨年のW杯は、中東・アラブ地域で初めて開催され、史上初めて女性が審判団に加わりました。36人の主審候補者のうち3人が女性で、そのうちの1人が日本人レフェリーの山下良美さんでした。4歳の時、兄の影響もあり、通っていた幼稚園で行われていた地元クラブに入り、高校ではサッカー部がなかったものの、大学で再び女子サッカー部に入部し、後に国際審判員となった先輩に誘われてプロフェッショナルレフェリーとしての道を歩んだとインタビューで答えていました。「なでしこジャパン」がW杯で優勝した翌2012年に女子1級審判員を取得し、なでしこリーグ主審、国際審判員・1級審判員登録を経て、昨年9月Jリーグ（J1）で女性として初めて主審を務め、今回の快挙を成し遂げたサッカー人生には敬意を表したいと思います。

山下さんは、「レフェリーの魅力はサッカーの魅力を引き出せること」と語ります。それは積み重ねた努力と経験、そして一人ひとりの選手を大切に思う気持ちがあるからだと思います。「組合役員の魅力は組合活動の魅力を引き出せること」…私もあなたもそんな組合役員になりたいと思いませんか。



清水秀行　連合事務局長